

JTB グループ労働組合連合会
第6回震災復興ボランティア活動報告

JTB西日本地域労働組合 垣見嘉一

日時：2012年5月19日（土）～5月20日（日）

場所：岩手県陸前高田市

参加人数：31名（連合会幹事含む）

昨年3月11日から1年が過ぎました。「このままずっと他人事でいいのか・・・。」東日本大震災の発生以降、繰り返し様々な報道がされる度に、私の胸の中に問えるものがありました。しかしそんな私が震災以降、復興支援の為にいった事はというとわずか5千円の募金のみでした。この気持ちを払拭するにはどうすべきかと考えていると、現地に行ってボランティアとかできればなあと思う気持ちが今更ながら少しずつ大きくなっていることに気がきました。しかし一人で飛び込む勇気もなく時が流れていく中で、今回グループ労連主催のボランティア活動を知りました。「これならなんとか参加できるんじゃないか。」これまでの人生でボランティアは全くの未経験ながらも、このまま何もせずに日々過ごすのは耐え難く、ようやく決意して応募することにしました。結果、私は申込多数の中から抽選で運良く選ばれましたが、周りにはボランティアに参加したいのに様々な諸事情で参加ができない方もたくさんいました。その皆さんの想いも背負ってこの2日間精一杯活動しなければと思うと一層気が引き締められました。またボランティアを通じて被災地の役に少しでも立ちたいけれど、きっとこの2日間では微力過ぎて何も変わらないだろう。でも自分自身の目で一度現地を見ておかなければ、感じておかなければという想いの中、いよいよ出発の日を迎えました。

大阪からの参加でしたので、前日の午後に集合場所の岩手県一ノ関市へと向かいました。新幹線を利用して約6時間程度。日々の業務が多忙を極めていたので、気持ちのスイッチを切り替えるにはちょうどいい時間でした。改めて過去の震災レポートを読み直したり頭の中を整理していると、一睡もせずに一ノ関に着いてしまい移動時間は意外にもアツという間でした。やはり一人参加ということもあり緊張して、翌日の活動に向けて早く休むべきところが布団に入ってもなかなか寝付けませんでした。

活動1日目、天気はうす曇、気温9℃とひんやりした空気の中、朝8時ホテル玄関前には続々と参加メンバーが集合してきました。「長靴とかホンマにいるんかいな。荷物になるし・・・。」と思いながら渋々持ってきましたがそれは正解でした。すでに身支度万全で誰一人としていい加減な身なりの方はいらっしゃいませんでした。あとは女性の参加者が多いことに（約半数）驚きました。予定通りにバスが出発すると、幹事の下山さん、連合会の渦古会長から今日の予定やこれまでの取り組みについてなどのお話がありました。今回の参加が2回目以上の方も複数人いらっしゃって、より頼もしく感じました。陸前高田まで向かう約1時間30分のほとんどは長閑な景色が続く山道でしたが、田植えの風景や途中のある学校では運動会が行われていました。昨年は中止を余儀なくされた学校もあった

と思いますが、今年は予定通り行われているだろう事に少し嬉しくなりました。

いよいよ陸前高田に到着となる前に道の駅でトイレ休憩、ここには震災前の陸前高田市内の様子が写真で展示されていました。程なく陸前高田のボランティアセンターへ。

この日の活動は更地を畑にする作業（瓦礫拾い、草刈り）ということで、スコップや鎌など作業道具の積込や活動に当たっての注意事項、陸前高田市の被害状況について担当の方からお話をお聞きしました。またこの日は我々を含め約400名のボランティアが訪れているということでしたが、昨年の多い時では約1,500名程度訪れていたということでした。ボランティアセンターを出発して数分で突然、一階部分が無くなった家が目に飛び込んできました。しかしその場所から海は一切見えないどころか方向すらわかりません。さらに小高い丘を超え、バスが坂道を降りていった瞬間そこは一面の更地に。一瞬にして世界が変わっていました。所々に山のような瓦礫、ショベルカーなどが点在し、いくつかの高層の建物は流されることなく残っていましたが、津波の高さが4階部分まで押し寄せたことが明確にわかる姿で残っていました。まだ復興に向けて新たなスタートを切ったというよりは後片付けの途中だというのが、陸前高田に入った私の第一印象でした。

いよいよ活動場所に到着。この日はJTB東北の社員の皆さん約20名も合流し総勢約50名で数班に分かれて活動を始めました。パッと見た感じは大小の石が転がっており、瓦礫も雑草もチラホラという感じでしたが、いざ腰を据えて作業しだすと、鉄くず、瓦、ガラス、食器などが次から次へと出てきてしばらくすると「これ今日終わるのかなあ」と思うほどでした。

徐々に天候も良くなって気温も上がり始め、各班リーダーの指示で随時休憩を取りながら活動は進められていきました。私はゴム手袋の上に軍手をつけていましたが、軍手は半日でかなりボロボロに破れていたもので、軍手のみでは怪我をしたり作業に集中できなかつたと思うと、事前のいただいた案内通りにしっかり準備をしてきて良かったと思いました。作業場所からは新緑の美しい山々が見渡せる上、海も近く太陽の光でキラキラと綺麗に輝く海面が望めましたが、決壊した堤防や建物も間近にあり、あの日この海が牙を剥いたかと思うと改めて津波の恐ろしさを感じました。午前、午後と約2時間ずつ精力的に活動し、終了すると大きな瓦礫の山ができていました。

活動の後、ボランティアセンターで道具の返却、うがい手洗い、お菓子や飲み物をいただき道の駅で小休憩して一ノ関へと戻りました。

夕食は懇親会ということでほぼ全員の方が参加されました。私も活動中は遠慮がちでしたが、この機会が多くの方とお話ことができました。途中、各労組毎に自己紹介を行い、ボランティアに対する思いなどを話したりして、2日目に向けてより懇親を深めることができました。



活動2日目。朝から天候は快晴。前日と同様に朝8時に一ノ関を出発し、陸前高田へ。この日の活動は小学校、中学校のグラウンドでひまわりの種まきを行うことになりました。到着すると明らかに高台と言えるところに隣接する小学校と中学校。しかしここもまた津波が押し寄せ、中学校の体育館と1階は今も無残な姿をさらけ出していました。もちろんこの場所から海を見ることはできず、まさかここまで津波が押し寄せるとは誰も思わなかっただろうことは容易に想像できました。

小学校のグラウンドでは少年野球チームが元気な声で試合をする中、グラウンドを取り囲むようにひまわりの種を植えていきました。2日目とあって皆さんの連携、手際も前日より数段に良くなり、お昼過ぎには活動を終了させることができました。今年の8月に花が開き、児童、生徒達の笑顔が溢れることを切に願っています。

ボランティアセンターへ戻る途中には高田松原の奇跡の一本松を車窓から見学、また多くの方が命を落とされた市役所、市民ホール前では下車して皆で手を合わせました。建物内外の様子はあの日のままで、あまりの惨状に言葉を失いました。改めて生き残った私達ができることは何かをもう一度考え、また亡くなられた方々、被災者の方々の想いを背負って前を向いて生きようと心に誓いました。

ボランティアセンター、道の駅を経て再び一ノ関へ戻って汗を流した後、帰路18時頃に一ノ関を出発、自宅に着くとちょうど日が替わっていました。帰りの新幹線は疲れと安堵感からかよく眠れました。

最後にこの2日間を通じて一人不安な中参加しましたが、想いを共にする仲間と活動ができ本当に良かったです。頻繁にお声かけいただいたり、お気遣いいただいた皆さんにこの場を借りて感謝を伝えたいと思います。ありがとうございました。またグループ労連でもこのような機会を設けていただき感謝しております。役員、幹事の方々、事前の準備から当日の運営、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。また機会があれば、是非参加したいと思います。

今回の活動を通じてようやく胸に問えていた「他人事」ではなくなりました。しかし私の単なる自己満足で終わるのではなく、これから一人でも多くの方にこの事をお話すること伝えることによって、微力ながら復興の輪を広げ続けて行きたいと思います。

